

新春公開
劇場
アニメーション
原作小説

新連載

あした世界が 終わるとしても

幼いころに母を失くして以来、
心を閉ざしがちな真。
彼をずっと見守ってきた、
幼なじみの琴莉。
高校三年生の今、
ようやく一歩を踏み出そうとした
二人の前に突然、
もうひとつの東京から
もう一人の「僕」が現れる――。
アニメーション界の若き才能が自ら執筆した、
初オリジナル劇場長編アニメーション
(2019年1月25日全国公開予定の
原作小説。

櫻木優平

a世界 — I

あした世界が終わるとしても、別に構わない。

灯りを消した夜の自室で、僕はそう思った。秋の冷気が窓ガラス越しにしみ込んでくる。

自分の境遇について考える。八歳の時に母親を亡くした。そのころから父親は仕事に逃げ込むかのように家にいる時間が減った。家族との温かい時間というものはなくなった。今のご時世、別に珍しいことではない。それはわかっている。

自分の将来について考える。もうすぐ大学を受験する。成績に困ったこととはない。科学者である両親の遺伝だと思う。感謝すべきだと思う。それはわかっている。

今の人生に不満はない。ただ、この感覚をどう伝えればいいのか。伝える必要があるのか。誰に伝えようとしているのか。わからないけれど。とにかく。あした世界が終わるとしても、僕は別に構わない。そう思った。

スマホのアラームを止めて身を起こす。カーテンの間からは、明るい朝日が射し込んでいる。僕はベッドから起き上がり、階段を下りてリビングに向かう。父親の源司は、きょうも職場に泊まったようだ。二階建ての一軒家は、がらんと静まり返っている。

冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルとシリアルバーを取る。とある雑誌で、朝は固形物を食したほうがいい、という記事を読んで以来、朝食はこの組み合わせを続けている。

テーブルにペットボトルを置き、スマホのニュースを眺める。

「増え続ける突然死。その原因は？」

そんな記事が出ている。突然死……。最近この手の記事が多すぎてすっかり見飽きていた。結局どれも勝手な推測を立てるばかりで何の答えも出ないので、見ていてモヤッとする。

それに個人でどうこう出来る問題じゃないし、なるようにしかならない。シリアルバーをかじりながら、僕はそう思った。

「どこ受けるか決めた？」

「えーまだよくわかんないかも。やりたいこととかないしねえ」

「もうそろそろ決めないとやばくない」

「まあねえー」

廊下には大学入学募集のポスターやセンター試験の案内が並んでおり、その前で同級生が立ち話をしている。あと半年もしないうちに大学受験だ。僕はその前を通り過ぎ、教室に入ると自分の席に座り、腕を枕にして突っ伏す。周りではみんな集団を作り会話をしている。内容はどれもくだらないトレンドの話。騒がしい教室の中、席の前に人が立つ気配がした。

「おはよう。真」

隣のクラスの幼なじみ、泉琴莉だ。僕は顔を上げる。琴莉はしやがみ込み、机に肘をかけながら話しかけてくる。顔の距離が近い。

「お父さん帰ってきた？」

「いや、今朝は帰ってなかった」

僕は気取れないように答える。

「もう三日目だよ。ブラック企業じゃん……うちのお父さんに言おう

か？」

琴莉の父親は、日本を代表する大企業・泉重工の代表取締役だ。そして僕の父親・源司は泉重工東京研究所の所長。研究が佳境に入ると何日も帰らないのは、よくあることだった。

「いや、いいよ。どうせ好きで帰ってないんだろ」

「ひとりで大丈夫？ 今日、うちに泊まる？」

ほんとこいつ……自分が何を言っているのかわかっているのか？ そう

思っていると、後ろを通りがかった女子が、すかさずからかう。

「うわ琴莉ちゃん、朝っぱらから攻めるねえ」

「えっ、そういう意味じゃないから！ 私たち幼なじみだから！」

いや、その反論は逆に恥ずかしい。

「はいはい、おっはよー」

女子は聞き流して、窓際にかたまった集団のほうへ向かっていく。琴莉は誤魔化すように突然立ち上がり、改めて僕を見る。

「とにかく！ 何か困ったことあったら、ちゃんと行ってね」

「ああ」

琴莉は小走りで自分の教室に戻っていく。僕は琴莉を見送り、再び突っ伏す。窓際の集団の会話が耳に入ってくる。クラスでもヒエラルキーの高い集団だ。

「最近、あいつら一緒にいること多くね？」

「えー？ 琴莉に興味あんの？」

「いやいや、ねえよ」

自分たちの噂をされていることには気づいたが、どうでもいい。勝手にしろよ。そう思って僕は目を閉じた。授業が始まるまでの貴重な時間、寝ることにした。

昼休み、校舎の裏手に取り付けられた、古びたコンクリートの階段。その二階と三階の間の踊り場に腰をかけ、スマホで時事ニュースを読む。増え続ける突然死の記事がトップに上がっている。最近特に多いらしい。とはいえ僕に何が出来るわけでもないの、サラッと読み飛ばした。東京都内で連続殺人が起きている記事も上がっている。本当に最近世界が混沌としているように感じる。

僕は昼休みをこの誰も通らない非常階段で過ごす。教室にいと、成績上位のせいかよく誰かに話しかけられる。この問題の解き方を教えろとか。試験に出そうな範囲を教えろとか。教えることによる優越感も多少はあったが、三年に進級してから、あまりにもその数が多くなり、さすがに鬱陶しくなってきたので、ここで過ごすのが日課になった。それに冷静に考えると、教えることによる自分へのメリットは全くない。

校舎の中にはまだ大勢の学生がいるのに、ここは不思議なくらい静かだ。秋の風が枯れ葉を揺らす、かすかな音だけが耳に入る。僕しか知らない秘境にいるようで気分がいい。

「悪い。呼び出して」

突然発せられた男の声に秘境を崩された。多少イラつきながら話を聞いた。

「あの……話って？」

「あーっと、いま付き合ってるやつとかいんの？」

「え？ いないけど……」

どうやら、告白シーンに立ち会ってしまったらしい。僕は興味本位で、階段の手すり越しに階下を見る。非常階段の下り口に、同じクラスの倉瀬と、琴莉が立っていた。僕としたことが、普通に動揺してしまった。

今朝クラスで聞いた声を思い出す。そうだ、確か琴莉と僕の関係を気にしていたのは倉瀬だった。つていうか興味ねーんじゃないのかよ……。僕はしゃがみ込んで引き続き会話を聞いた。

「ごめん、いま、そういうのはちよっと」

「俺のこと嫌いなのか？」

「別に嫌いとかじゃないけど」

「じゃあ好きと一緒じゃん」

「え……違うけど……」

かなり強引だ。だけど時に男にはこういう大胆さも必要なのかもしれない。実際、倉瀬はモテる。琴莉は倉瀬に興味なさそうだけど、このままだとちよっとまずいか。僕は軽く深呼吸をして立ち上がる。

「まあ、まずは試しに一回付き合おうぜ？ そっから考えよ？」

「ちよっと！」

倉瀬が琴莉の腕に手をかけたところで、僕は非常階段を下り終えて二人の前に立った。

倉瀬が僕に気づき、驚いた顔をする。

「あの……もうやめない？」

琴莉も驚いて振り向く。

「え？ 真？」

「は？ なんでお前が出てくんの？」

倉瀬の顔がみるみる怒りに満ちていく。

「いや……たまたま聞こえたから」

「邪魔すんなよ」

「でも……琴莉、倉瀬君に興味ないみたいだし」

焦ってついつい本音が出ってしまった。

「ああ!? 琴莉、琴莉って……お前、泉の何なんだよ！」

すごく怒らせてしまった。どうしたものか。倉瀬が踏み出してきた。一発ぐらいなら殴られてもいいかと諦めかけた時、チャイムが響きわたった。倉瀬は氣勢を削がれ、振り上げかけた拳を下ろした。

「何なんだよ、お前ら……」

倉瀬はそう言って僕と琴莉を一度ずつ睨み、歩み去った。確かにこの状況、男としては屈辱だろう。僕は一息ついて歩き出した。

「僕たちも行くぞ」

「え？ あ、うん！」

琴莉が後ろをついてくる。顔を見なくても嬉しそうなのが伝わってきた。僕の完全勝利だった。

午後の授業を終え、クラスの誰と話すこともなく教室を出る。

「真、一緒に帰る？」

靴に履き替えていたら琴莉が声をかけてきた。珍しいことだ。家は同じ方向だが、普段は別々に登下校している。こういう誘いのある時は何か話がある時だ。

僕は琴莉の後ろをついて歩いた。都内とはいえ、住宅地であるこの一帯は、人影も少なかった。途中、大きな公園に入る。紅や黄に染まった並木の葉は、ゆるやかに沈んでいく日の光を受けて輝いている。石畳に積もった落ち葉を踏みながら気持ちよさそうに歩いている琴莉が、口をひらく。

「今日はありがと……助けてくれて」

やっぱりそれを言うために誘ったのか。目的がはっきりとして、少し安心する。

「別に……。なんで告白、断ったの？」

僕は特に深く考えず琴莉の背中に問いかけた。

「え？」

「あいつ、モテるじゃん。バレエ部キャプテンだし、顔いいし、そこそこ頭いいし」

「それは……なんでそういうこと言うかな」

ん？ なにやらご機嫌を損ねてしまったらしい……何かまずいこと言っ

たか？ 僕はとりあえず無言で様子を伺った。

沈黙が続いたのち、琴莉が口をひらいた。

「もうすぐ高校も卒業かあ」

いきなり話が飛んだ。僕はとりあえず会話を繋げてみた。

「まあ、その前に受験あるけど……」

琴莉はまた黙ってしまった。この台詞は間違っていたらしい。だが、しばらくして琴莉が口をひらいた。

「私たち、このままでいいの？」

その言葉で、さすがに僕も主旨を理解した。幼なじみということでは、まですうやむやにし続けてきた僕らの関係性に、はじめをつけようとしている。僕はとりあえず察しの悪い振りをして切り抜ける事にした。

「何がだよ」

「察してよ……いつまでも待てないよ」

切り抜けれなかった。どうやらそろそろ腹をくくらないといけないらしい。僕は次の一言を考えた。この状況、待たせれば待たせるほど気まずくなる。これまで見てきた映画や漫画など、あらゆるソースから最適解を探す。頭を高速回転させた。そして出た言葉はこうだった。

「あした……デートしませんか？」

あまりのダサさに自分の耳を疑った。この場合は、口を疑ったほうがいいのか。なににせよ、これまで自分の人生で得た知識から絞り出した言葉は驚愕のダサさだった。舌でも噛み切るべきか考えたが、その前に琴莉が立ち止まり振り向いた。

「うん……あ、はい！」

驚いた顔が、見る間にほころんだ。ダサい台詞は正解だった。

琴莉と別れ、自宅に帰り着き玄関に入ると、父の源司が家を出ようとしていた。現実に戻ってきた気分になる。ヨレヨレのスーツに無精髭、疲労を隠せない顔。

「真、悪いな。最近、なかなか帰れなくて」

「別に……」

僕は目を合わせずに父さんの横を通りぬける。

「すまん、仕事に戻る。時間がないんだ……」

「勝手にしろよ」

辛辣な言葉が口をつく。

「真……」

父さんが声をかけて来たが、僕はそれを無視してリビングに入りドアを閉めた。父さんは無言のまま、しばらくして出て行った。

「ほんと……何してんだよ……父さん」

昔は違った。母が生きていたころは。パリッとしたスーツを着ていたし、優秀な研究者として世間では有名だった。僕も憧れていた。母さんが死んで、父さんは変わった。まるで仕事に逃げ込むかのように家から離れていた。母さんの死因は例の突然死だった。

そうだった。僕はこの世界が理不尽なのを知っていた。それで思ったのだ。あした世界が終わるとしても、別に構わないと。

だが、今は構わなくなかった。あしたはデートなのだ。

*

あした世界が終わるとしても、別に変わらない。

早めに潜った布団の中、なかなか眠れない私はそう思った。私の世界は

とても狭い。その中で自分に出来ること、したいことはとても限定的で明確だ。私はそれをするだけだ。それ以外は関係ない。世界がどうなるうと関係ない。あした世界が終わるとしても、私は別に変わらない。そう思った。

早めに目が覚めた。今日のデートに来ていく服は、昨日のうちに選んでいた。真はモノトーンの服を好むので、私もそれに合わせ、モノトーンのコーデインイトでまとめた。

髪を念入りにブローしながら、昨日のことを思い出した。つついニヤついてしまう自分が気持ち悪いと思った。察しの悪い真に少しイラっとして、つつい意地悪な言い方をしてしまったけれど、まさかあそこまで直球で返事が返ってくるとは思っていなかった。

真は少し変わっている。自覚なさそうだけど。倉瀬君の告白に割って入ってきた時もそうだったけど、時々驚くような行動をとる。普段は合理主義とか何とかで必要以上に人と話さないようにしているらしい。ちゃんとした友達はいなさそうだ。そんな真だからこそ、私とだけはちゃんと話してくれることが嬉しかったりもするのだけれど。

午前十一時に新宿東口前に集合の予定。少し早めに着いたらすでに真がいた。ガードレールにもたれて落ち着きなくスマホを確認している。その光景がかわいかったので、しばらく隠れて観察することにした。

待ち合わせの時間になったので真の前に向かう、スマホに気を取られてこっちに気づいていない。

「真」

声をかけると真が驚いて顔を上げる。全身まじまじと見てきた。コーデ

インイトは成功したようだ。

「ごめん、待った？」

「全然、今来たところ」

ラブコメのテンプレのような返事が返ってきた。思わず笑ってしまう。

「……んだよ」

照れる真がかわいかったのでお返しに、私は姿勢を正し、ぺこりと頭を下げ、ラブコメのテンプレのように言う。

「今日はエスコート、よろしくお願いします」

「……じゃあ、行こうか」

真は困ったような顔をして、歩き出す。私はそれについていく。

デートコースは真が考えてくれていた。買い物などは後半にまとめられていて、荷物がかさばらないプランになっている。こういうところは気が利く。まずは映画を観る。お互いあまりラブストーリーには興味がなかったので、今話題になっている海外のアニメ映画を観た。普通に面白かった。感想などを言い合いながら、ゲームセンターに向かい、プリクラを撮る。私はよく友達と撮るが、(友達がいない……) 真は初めてだったようで作法がわからず終始困惑していて面白かった。そのあとカフェで軽くご飯を食べて、買い物をした。ほとんど私ばかり買っていたけれど、荷物は全部真が持ってくれて最高だった。

少し歩き疲れたので、伊勢丹の屋上庭園に行ってみることにした。幼いころ両親に連れられて行ったとき以来だったが、そのころと変わらず、色鮮やかな花々が咲いていた。私は懐かしさも相まってテンションが上がった。真はさすがに疲れたらしく、ベンチに座って私を目で追っていた。

そろそろだと思った。今日はとても楽しかった。だけどまだ重要なイベントが残っているのだ。私は一つ一つ花を觀賞して回りながら、さりげな

く真に近づいた。そしてしばらく背を向けて鑑賞を続けてみた、すると突然声をかけてきた。

「琴莉」

「ん？」

私は振り向いて真を見た。顔を見た瞬間にわかった。真はこれから私に告白する。とうとうこの時が来たのだ。私はこの時をずっと待っていた。

「僕は、君のことが」

その時、バッグに入れていたスマホの着信音が響いた。最悪だ。私は慌ててスマホを確認した、お父さんからだった。

真は氣勢を削がれ、明らかに動揺している。やけに大きく響く着信音。もはや告白する空気は失われた。

「ごめん、お父さんからだ」

私はしかたなくそう言うって電話に出た。なんでこのタイミングに連絡し

β 世界 — I

「ハザマ・グンジに死を！」

若い女の声が高らかに響くと、巨大な刃が振り下ろされた。手足を縛られ、跪かされた中年男の首が、ごろりと転がる。途端、群衆から湧き上がる喝采。処刑台の周りを数千の人々が囲み、諸手を上げて恍惚とした表情を浮かべている。簡素を極めた服装は、どこか囚人を思わせる。

「我は公女コトコである」

再び、若い女の声。処刑台の遥か上方から、群衆へと降ってくる。

「皆の者、我を常に崇め、常に愛し、その想いを一瞬たりとも忘れるな」

歓声がより一層、大きく上がる。群衆は塔のごとくそびえる演説台の頂

てくるの。娘に嫌われるよ。一言文句でも言ってやろうかと思った。

「え……」

だが、お父さんの口から出た言葉は、全てをかき消した。

「……うん。私から伝える」

私は出来るだけ真に動揺が伝わらないように受け答えをして、電話を切った。

「どうした……?」

真が不安そうに聞いてきた。どうやら動揺は隠せていなかったらしい。私は静かに深呼吸をして真を真っ直ぐに見た。

「真……」

私はこれから。

「落ち着いて聞いて」

真を悲しませるんだ。

点に立つ、コトコを見上げている。熱に浮かされたような無数の目。コトコは下々の者の視線を意に介することなく、その明るい茶色の瞳でグンジの亡骸を一瞥する。やがて白い着物の裾を翻し、公居の奥へと姿を消した。コトコは、琴莉と同じ容姿をしていた。

*

日本公民共和国の首都、東京。その中心たる公居は、巨大な濠と石垣に囲まれて屹立している。周囲には清潔だが無味なビル街が広がり、口を閉

ざし目を伏せた人々が静かに歩いている。彼らに生気が満ちるのは、公女コトコを前に熱狂する時だけだ。

そして公居とビル街を丸く取り囲むのは、「ドーム」。天を衝くばかりに高く築かれた壁は、赤く、重く、厚く、その円形に並んだ壁に、透明だが強固な天蓋が載せられている。ドームは神話に出てくる城塞にも似て、首都を堅く守っていた。

壁の外に茫漠と広がるのは、崩壊した都市の名残だ。かつて、より広大だった首都は、赤いドームのみを残し、廃墟の連なる荒野と化していた。

なかば崩れ落ちたビルとビルの谷間に、ひび割れた舗装道路が伸びている。そこに黒ずくめの姿で立ち、拳を握りしめてドームをにらむ少年がいた。切れ長の目に怒りを燃やす彼の耳には、先ほど壁の向こうから聞こえてきた歓声が、まだ響いている。父・グンジの死を知らせる歓声。ハザマ・ジンは、この声を一生忘れないだろうと思った。

ジンは目を閉じ、短く黙祷を捧げると、踵を返して歩き出した。往年の地下鉄の入り口から、灯りひとつない暗闇へと階段を下りていく。ホームまでたどり着くと、暗視スコープをつけて線路へ。あちこちに山をなしている瓦礫の隙間を縫うように歩を進める。もともと入り組んでいる地下鉄の線路は、今や壁や床に穴があいており、そこも通路と考えれば周辺の地下街や上下水道とつながって、二十三区とほぼ等しいサイズの迷路となる。日本公民共和国に対するレジスタンスたちは、この迷路のあちこちに潜んで活動していた。

よどんだ空気にかすかに汚水の臭いがまじる中を小一時間も歩き、ジンは自分と父の研究施設へと帰り着いた。父亡き今、ジンを待つのは無言の遠隔人型兵器・アルマだけだ。髑髏に似た頭部と、三メートルに近い長身を持つアルマを前に、ジンは決意を口にする。

「俺が、この国を変える」

ジンは広げた両腕の袖から、黒く光る電極が伸びる。その先が発光し、ほとぼしり出た光はたちまちジンとアルマを丸くくるんで、もうひとつの東京へと転送した。つかのま光あふれた地下迷路は、再び闇に沈む。

ジンは、真と同じ容姿をしていた。

(続)

さくらぎ・ゆうへい●アニメーション監督。クラフターに所属し、最新技術を投入したアニメーション手法「スマートCG」にこだわり、話題作を発表し続けている。主な作品に『INGRESS THE ANIMATION』(監督)、『ソウタイセカイ』(脚本・監督)、『新世紀いんばく』(脚本・監督)、『花とアリス殺人事件』(CGディレクター)がある。今最も注目される若手クリエイターのひとり。